

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

フェアリーテイルの傍観者

【作者名】

撫で肩原人

【あらすじ】

テンプレみたいに転生したオリ主がFAIRY TAILの世界で基本傍観をしながら生きていく物語である。

作者はこれが初めての投稿です。至らぬ点が多いと思いますが
お願いします。

プロローグ

気づいたら辺りが真っ白な空間に僕はいた。あれ？さっきまで自分の部屋にいたのに何でこんなところにいるんだろう。まあいいや、寝ようかな。ん？なんか目の前が光ってきたぞ。

「……………うわっ、眩し!!」

光を直視してたらこうなるよな。でも、なんで光ったんだろう。やっと視力が回復して光っていた場所に目をやると、

「本当に申し訳ございませんでした!!!!」

土下座をしている羽を生やした少女がいました。……………なにこのカオス？

「なんで土下座してるの？」

僕は未だ目の前で土下座している少女に問いかけるが、

「すみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみません決してわざとじゃないんですただ夜ふかしすぎて勤務中ふらふらして思わずあなたの生命の火に水をかけてしまったんです本当にすみ

ません許してくれとはいいませんでもできる限りのことさせていた
だきたいと思っっています転生でも何でもいいですよああ私が憎いな
ら煮るなり焼くなり自由にしてください本当にすみませんすみませ
んすみませんすみません(最初に戻る)「

と、「」のよつにひたすら何かを言っているだけだ。しかも早口過ぎ
て唯一聞こえるのが「すみません」だけだ。これがかれこれ10分近
く続いている。何とかしないと話が進まないしな……………よし!!取
りあえず頭を上げてもらおう。でもどうやって上げてもらおうかな
?まあ、もう一度話しかけるか。

「すみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみま(r)y」
……………」

「あ、すみませんすみませんすみませんすみません(r)y……………」
話を聞け!!」

「あ、」

あ、あまりにも話を聞いてくれないからチョップしちゃったよ。
てか反応かわいいなおい!取りあえず謝るか。

「すまん。話しかけても全然反応しないから思わずチョップしちゃっ
たよ。本当にすまん。できたらさっき言ってたことをもう少しゆっ
くり行ってくれないかな?」

「は、はい!すみませんでした!!」

良かったやっとな話を聞いてくれたよ。ようやくこの状況がわかる。

「じゃあ教えてくれない?」

「はい、じゃあ初めに私は“天使”のユンといます。あなたは四ノ宮恭弥さんであっていますか？」

「うん、四ノ宮恭弥は僕だよ。天使のユンさん……ん？てんし？てことはここは天国なのか？」

「はい。正確に言えば天国と現世の間です。四ノ宮さんは“死んでしまった”のでここにいるんです。」

へえ〜そうなんだ。僕は死んだんだ、死んだ？

「え!?僕って死んだの!?!なんで!?!」

「私のせいです、すみません！夜更かししすぎて天使の仕事中にふらして間違えてあなたの生命の火に水をかけて消してしまっただけです。本当にすみませんでした。許してくれるとは思いませんですが私にできることならなんでもします。転生でなんでもいいですよ。もし私が憎いというのなら煮るなり焼くなりしてもかまいませんから」

「わああ、まさかそんなことで死んでしまったのか僕。でもいいか。あんな同じことの繰り返ししかない世界なんてつまんなかったし。許してあげるよ」

「そうですね。許してくれませんか、せめて私も死ん」だから、許すって言うてるじゃん!」「え?」

ユンさんがぼかんといい効果音が出てそんな顔になったかわいいなあ。あ、しょうきになったみたい

「な、なんでですか!? 私はあなたを殺してしまっただんですよ!」

うん、普通だったからおこると思うけど

「ちつきも言ったでしょ、僕はあんな世界で生きているのにつまなく感じてたし、それに転生させてくれるんでしょう? ならいいじゃん」

「あ、ありがとうございます〜」

あれなんか泣き出しちゃったな。とりあえずあやすか

「ほら、泣かないで泣いてる顔もかわいいと思うけど僕は君の笑っている顔がみたいな」

「か、かわいいノノノノ」

ヤバ、なんか口説くようになった。まあいつか

「よ、四ノ宮さ、いいえ恭弥さん。私のせいどころなくなってしまったんで好きな場所に転生させてあげます! それに特典も付けましょう! どうしますか?」

「じゃあ、とびきり面白い世界に転生させて、特典はユンさんが決めていいよ」

「そんなアバウトでいいんですか?」

「うん、僕生きてた頃あんまり漫画とか読んだことなかったからどんな世界が面白いかわかんないんだ。だからユンさんが決めて」

そう、僕は生前? は親に勉強勉強と言われていたので漫画とかを読

んだことがないのだ。流石に one piece とか NARUTO とか有名な奴なら題名位わかるよ。

「わかりました。そしたら転生先も特典も私が決めさせてもらいます。では恭弥さん、名残惜しいですがお別れです。転生先になったら手紙が届くと思うんでそれで把握してください。」

「わかったよ。それじゃあユンさん僕を転生させてくれてありがとう」

「いえ、私には礼なんてもつたない。では恭弥さん新しい人生楽しんでくださいー！」

パカッ

ん？なにこの浮遊感。床は……ない。これは

「ユンちゃん……ん!!!!!!」

そう叫びながら僕は意識とともに落ちていった。

「いってしまいましたね。恭弥さんとても優しい方でした。もう一回会いたいなあ。あっ、転生先決めなきゃ！確か恭弥さんの要望は『とびきり面白い世界』でしたね。そういえばこないだ読んだ現世の『フェアリーテイル』って漫画面白かったな……よし！そこにしよう

！見た目は今のままでもかっこいいから髪の色だけ私が好きな銀にしよう！あの世界意外と危険だから魔力をマカロフ位にしとけばいいかな、魔法はミストガンとジェラルルの魔法がカッコよかったからそれにしよう！ミストガンの魔法は少し強化してよしっ！最後にこのことを手紙に書いてと……これでよし!!」

こうして恭弥は魔改造されてくのであった。

第一話 チュートリアル

目が覚めたら深い森の中だった。これじゃあお決まりの「知らない目」(ry)と言う名ゼリフが言えないじゃないか!!!

「まあ、それはどうでもいいや。ユンさんの話だとこの世界の事と僕の特典について書かれた手紙が来るはずなんだけど……………」
「わっ!？」

突如として目の前が光って何かが出てきたので僕は思わず仰け反ってしまった。そして、目を開いた先には一つの便箋があった。

「これがその手紙なのかな？他にそれっぽいものないし、取りあえず読んでみるか。えっと……………」

『「んにちわ恭弥さん！この手紙を読んでいるということは無事に転生できたみたいですね。では早速その世界と特典について説明しますね』

良かったこれであってたよ(ホッ)

『まずその世界は《FAIRY TAIL》と言う漫画の世界です。その世界には幾多も魔道士ギルド存在し、そこでは、魔導士達に仕事の仲介などがされています。そこが魔道士達の働く場所ということですね。仕事には色々あって一般人からの簡単なものから難関討伐まで様々なモノがあります。仕事するだけでも充分楽しめると思っています。』

マジか!?面白い世界にしてくれて言ったけどこういうのは予想外だなあ。てか、俺魔法使えないからギルドにも入れないじゃん!?

様々な魔法陣を組み合わせる使った魔法みたいだ。本来は天体魔法よりも弱かったはずなのにユンさんの強力のせいでエライことになっている。なんだよ!? 陣を重ねる毎や陣の大きさをでかくすることにその威力があがるって!? しかも最大で100陣で直径1キロって!? どうなっちゃうのこれ!? 最大で発動したらどうなるんだよ!? 五重でも相当な威力なのに……………あきらめよ。

取りあえず一回使ってみますか!

最初は天体魔法だ!

「流星(ミーティア)!!」

うおっ!なんだこれ!? スゴイ、こんなに速いし空も飛べるんだ。これクセになりそう。

よし次!

確か空に七つの魔法陣を書くんだったけ、まあ行きますか。

そして僕は空に七つの魔法陣を描き

「七星剣(グランシャリオ)!!!」

魔法陣から衝撃波が打ち出され地面に当たった瞬間、爆音が轟、凄まじい砂煙が舞った。砂煙が晴れたその先には……………綺麗な更地ができてました。

「おいおい、百重魔法陣とか使ったらどうなるんだよ(震え声)取りあえず陣も一つ撃とうかな」

僕は五つの魔法陣を頭の中で描き目の前に展開させる。そして、

「五重魔法陣 御神楽!!」

それぞれの魔法陣から巨大な光線が出てきて地を直撃した。また凄まじい砂煙が舞い、晴れた先には七星剣には少し劣るものの綺麗な更地ができてました……………これは本当にやばい！五重でこれだぞ!?百重は単純にこれの20倍って考えると、ああ頭が痛くなってきた。それに魔力を一気に使ったのか体がふらついてきた。

「今日はもう休むか」

僕は更地とかした場所から離れ滝の裏の洞窟で眠るのであった。

「おう、わかるぞ。というか俺はその魔道士だからな。今帰っている途中なんだよ」

「本当ですか!? 僕そのギルドに入りたいんです。連れてってもらえませんか?」

「確認として聞くがちゃんと魔法は使えるよな」

「はい、大丈夫です」

「よし! それなら行くか。仲間が増えるのは大歓迎だ! 俺の名前はギルダーツ・クライヴだ。おまえは?」

「僕は四ノ……………キョウヤ・シノミヤです。よろしくお願いします」

「キョウヤか、よろしくな!」

いやー偶然話しかけたのが《妖精の尻尾》の魔道士だったとは運がいいな。それにこの人、ギルダーツさんはとても強そうだ。今の僕が勝てるかどうかもわからない。それに街に行くまでに話をしたけどとても面白い人だった。こんな人ばかりなのかな《妖精の尻尾》は? そしたら楽しみだね

「キョウヤ。もうすぐギルドのある街だぞ。」

「うん。わかった」

ギルダーツさんのいった街に入ろうとしたら鐘の音が鳴り響き突然地面が揺れて街が割れて一つの道ができた。

「なんですかこれ!?ギルダーツさん!どういことですか!」

「あーなんか俺の魔法対策らしいんだけどそんなことどうでもいいじゃないか。最短で行けるし」

「あ、はい」

うん、この人だけでも充分面白い!この世界はいいなあ。一人一人のために街を改造とかスゴイよ。一直線になった道を歩いて行くところの大きな建物があり、そこには《妖精の尻尾》と書かれていた。

「ここが魔道士ギルド《妖精の尻尾》だ。」

「おお。大きい建物ですね。ん?でも仲が騒がしいみたいですね?」

「騒がしいのはいつものことだ。それじゃあ中に入るぞ。」

「あ、ちょっと待って下さい!!」

「あん?どうしたんだよ?いまさら怖気づいたか」

「いえ、そうじゃなくて。僕、あまり人と話がしたくないのでなかにいる人たち眠らせてもいいですか?」

「よくそんなんでギルドに入るうとしてたな(呆れ)まあ、眠らせるのはいいけど俺はそんな魔法持ってないぞ」

「僕がするんで大丈夫です」

許可も降りたしやりますか!ギルドをおおえるくらいの魔法陣を

2つ描き

「二重魔法陣《催眠霧（スリープミスト）》」

二つの魔法陣から霧が発生し、しばらくしたらさっきまで騒がしかったギルドの中が急に静かになった。

「すごいなキョウヤ！こんな強力な眠り魔法が使えたのか!？」

「あ、はい。なんか頭の中にあっただというかなんとかか……………」

そうこの魔法はユンさんから貰った知識にあっただミストガンという人の魔法だ。でもギルダーツさんが知らないということはまだその人はギルドには入ってないのか。

「何変なこと言ってんだキョウヤ？そんなことよりギルドに入るぞ」

「はい…」

ぼくはギルダーツさんの後に続いてギルドの中に入る。ギルドの中は殆どが眠っており起きているのはカウンターの上に座っている老人だけだ。

「ギルダーツ!!これはお前の仕業か!？」

「ちげーよ。こいつがやったんだ。ほれ挨拶しろこの人がマスターだ」

このじーさんがマスターなのか道理で他の奴らみたいに眠ってないはずだ。

すっかり忘れてた！どっしょうっ、この姿だどこも部屋貸してくれ
なさそうだし……………

「そんなことじゃろうと思ったわい。今日はギルドの奥にある部屋を
使いなさい。住む場所は明日ワシと探しに行こうかのお」

「本当ですか!?ありがとうございます!!」

「良かったじゃねえか、キョウヤ」

マスターいい人だなあここでなら上手くやって行けそうだ。僕は
ギルドの奥にある部屋を目指しながら歩を進めながらこれからどう
なって行くのか楽しみで仕方なかった。

「これ、キョウヤ!!魔法を解いて行かんかい!!」

第三話 体が小さいと不憫だね

「お主はなんのために魔法を使う？」

「それは、

「

キョウヤside

どうも前回無事に妖精の尻尾の魔道士になったキョウヤです。今はなんと！初めてのクエストの最中なんです！クエストの内容は山賊の討伐？捕獲？です。ちなみにB級だそうです。取りあえず倒して軍に渡せばいいという簡単な仕事です。マスターにはこの歳でB級は早いと言われたが前回使った眠り魔法を使うと言ったら渋々了承してくれました。

「まあ、眠り魔法なんて使いませんけどねっ!!」

だってつまないじゃんそんなの。それに自分がどれくらいできるかも知りたいし。山賊さんには僕の踏み台になって貰おうかなっ

「お？あそこが山賊たちが占拠してる建物か。それにしても見張りも立てないとは……………馬鹿なんだろうっか？」

見張りもいないことだし正々堂々正面からいきますか。
僕は山賊たちがいる建物の前に立ち、扉を蹴り飛ばした。

ドォーン!!

「どうも、魔道士ギルド妖精の尻尾の魔道士です。今回は山賊の捕獲をしにきたんで大人しく捕まって下さいね」

建物の中に入ったら200人位の山賊たちがいてみんな額に青筋を立ててる。おー怖い怖い(笑)

「ふざけんなゴルア!!」

「ガキが何ほざいてる!!」

「ここに来たことを後悔させてやらあ!!」

「死ねえええええええ!!」

様々な暴言を吐きながら山賊たちが襲いかかってくる。

「こんな子供にキレて恥ずかしくないの？それに一人に対して200人もそれも9歳の子供にするなんてプライドとかないんですか？
まあいいや、それじゃあ行きますよー!」流星(ミーティア)『!!」

体に光を纏わせ高速で移動し敵を倒していく

「何だこのガキ!? 速すぎて見えねえ!？」

「くそっどこにいやが……………グハッ!!!」

山賊だとこんなものか。もう少しぐらい手応えがあってもよかつたな……………でも流星に『流星』だけじゃあ時間がかかり過ぎるな。でも俺の魔法は建物の中じゃ使いづらいし……………

「もういいや！建物ごとやっちまえ！」

僕は一旦外に出て建物の上に五つの魔法陣を描く

「くらえ！『五重魔法陣 御神楽』!!」

魔法陣からの光線が建物に直撃し、崩壊した。流星にやり過ぎたかなあ。山賊たちは瓦礫の下でのびていた。

「取りあえずこいつらを軍に引き渡さなきゃな」

しばらくは起きないだろうから僕はそのまま放置して軍を呼びに行った

「無事に軍に引き渡せたとしギルドへ戻るか」

軍を呼びに行つたとき全然信用してくれないから結局自分で20人近く運ぶハメになった。まあ、魔法使つて運んだからそんな疲れなかつたけど。山賊連れてきた時の軍の人達の顔はすげー面白かつたな。ざまあ見やがれ！でも、おかげで帰るのが夕方になつてしまつた。マスターに心配かけてないか不安だ。

マカロフ side

「キョウヤのやつまだ帰つてこんのお。そろそろ帰つて来てもおかしくないのじゃが……………」

「そう心配すんなつてジイさん。寄り道食つてるだけだろうよ」

「そうじゃといいんだが……………」

今日の朝くらいからキョウヤが初めてのクエストに出ている。流石に9歳の子供に山賊の捕獲クエストはどうかと思つたのじゃがキョウヤのやつがどうしてもと言うから許可してやったのじゃが帰つて来るのが遅い。キョウヤは眠り魔法を使うと言つたのじゃが何かあつたのじゃろつか。

改めて考えて見ればキョウヤ・シノミヤと言う少年は不思議な子じゃ。初めてあつたときは眠り魔法でギルドメンバーを全員眠らせてから入ってくるわ、人付き合いが嫌なくせにギルドへ入れてくれなど意味がわからない。それにあやつから感じられる魔力は相当なものじゃ。下手したらあの年で聖十大魔導並の魔力を持つておるやもし

れん。あやつがギルドに泊まった時に色々と話したんじやが掴みどころのないやつだった。でも、悪い奴ではない。これだけは断言出来るり会話していた時に聞いた「なんのために魔法を使う？」と言う問の答え

「僕は弱者のために魔法を使いたい。それが力を持つものの義務だと思っから……………」

あと、面白いこと見るためだねー！」

その答えを口にしていた時のキョウヤは淀みのない真っ直ぐな目をしており、「こちらが気圧されそうになった。最後の方の言葉は最初の方のギャップですっこけてしまったが……………」

そんなことで信用に足るのじやが、あやつはまだ9歳の子供。わしの孫よりも幼い。それなのにあれほどの覚悟をもっており。本当に不思議な子じや。

あと、ギルドに来るとき毎回毎回メンバー全員を眠らせてから入ってくるのはやめて欲しいわい。

「ん？眠い……………」

「ふわあゝ、どうやら帰って来たみたいだぜジイさん」

「そのようじやの。全くこれはどうにかならんかの〜」

ギルドメンバーが次々に眠ってしまった。そこへ一人の子供が入ってくる。

「只今、戻りました」

その子供はそれだけを言い、わしの所まで来た。

「キョウヤ、やけに遅かったのう。何かあったか？」

「いえ、ただ山賊捕まえて軍に引き渡そうとしたとき軍の人達が僕が捕まえたことを信じようとしないで山賊を引き取りにこなかったの
で、自分で山賊を運んでいたら遅くなりました」

「確かにこんな子供が山賊を捕らえたと言っても信じないじゃろ
うな。まあそれはしばらくの我慢じゃ」

「はい、それでは次のクエストを選んで今日は帰りますね」

キョウヤはクエストボードに行き、少し迷う素振りを見せたがすぐ
にクエストを見つけてわしの下まで持ってきた。

「マスター、次はこれを受けようと思うのですが」

「どれどれ……………!? A級クエストの魔物の討伐じゃと!？」

キョウヤが持ってきた依頼書はA級クエストじゃった。それも一
階のクエストでは最高難度の

「はい、それくらいなら僕でもまだ楽に勝てると思うので」

「お主がそう思っていてはわしがそう思わん！これはやめるのじゃ
!!」

聖十大魔導並の魔力を持っていたとしてもキョウヤはまだ9歳の
子供じゃ。そんな幼い子に受けさせるわけにはいけない！

「それじゃあそれだけの力があると証明できたらいいんですか？」

「な、何を……………」

「ギルダーツさん寝てないで起きてくださいよ」

「ん？なんだよ折角人が気持ちよく寝てんのに」

「僕と1回勝負してくれませんか？」

「あ？なんでだよ？」

「1回マスターと貴方には僕の力を見ててもらいたくて……………
いいですか？」

「そんなことならいいぜ、やってやるよ」

「ギルダーツ!!何を言っておる」

「まあまあ、いいじゃねえかジイさん。1回キョウヤの本気見てみた
くねえか？」

「それはそうじゃが……………」

「よし、それじゃあいつやるキョウヤ？」

「そうですねえ、今日はもう遅いし明日しましょう」

「わかったなら明日の朝町外れの森に來い。そこなら思いっきりでき
るだろう」

「わかりました。マスターもちゃんと来てくださいね。それとクエス
トのことも考えておいてください。それではまた明日」

キヨウヤがギルドから出ていったがわしはまだ立ったままだった。

キヨウヤ side

なんか成り行きでギルダーツさんと戦うことになったけど、まあ
いつか。一回くらい戦って見たかったし自分の全力がどんなものか
知りたかったから。

ああ、明日が楽しみだ。

ん？これってバトルジャンキーの思考
????

第四話 VSギルダーツ

キョウヤ side

今僕はマグノリアの町から離れた森の中にいる。ギルダーツさんとマスターに僕の力を見てもらうため、ギルダーツさんと戦うのだ。正直、楽しみで仕方が無い。ギルドに入ってから聞いたことだが現段階では妖精の尻尾最強の魔道士らしい。そんな人と戦うことが出来るのだ。バトルジャンキーと言われても戦うのが楽しみだ。

朝にここに来いと言われたから来たのだが肝心のギルダーツさんとマスターがいない。早く来すぎたかな？ まあ少ししたらくるか……………

5時間後

「よう、キョウヤ、早いな」

「すまんのお遅れてしまったわい」

そう言って二人が来たのは昼を過ぎてからだった。

「どうして遅れたんですか? (震え声)」

「昨日あの後ジイさんと飲んでな、ついつい飲みすぎてたっきまで起きてなかったんだわ。いやーすまんすまん」

そんな理由で遅れたのか。どうしようもないのやりようのない苛立ち
は、そつだ戦つときに思いつきりぶつけよう。

「じゃあ早速始めましょうか (黒笑)」

「キョ、キョウヤ? なんか笑顔が黒いぞ?」

「何を言っているんですかギルダーツさん? 僕はいつもどおりですよ? (黒笑)」

(あ、これはやばい)

僕とギルダーツさんは森の中の少し開けた場所へ行き、互いに構えた。マスターは少し離れたところで見ている。

「じゃあ始めましょうか」

「いいぜ、キョウヤから来いよ」

ギルダーツさんがあからさまな挑発をしてくる。

「じゃあお言葉に甘えて『流星(ミーティア)』!!」

僕は光を纏い高速でギルダーツさんの背後に回り蹴りを入れようとしたが

ガシッ

「おーおー中々早いじゃねーか」

ドガッ!

「くそっ」

簡単に蹴りを掴まれて逆に蹴られてしまった。流石に今のじゃ無理か。そもそも僕の体は9歳の子供だ。もとより接近戦は不利だ。接近戦は避けよう。幸いギルダーツさんは自分からは攻撃してこないようだから好都合だ。

「これならっ! 『五重魔法陣 御神楽』!!」

ギルダーツさんの上に五つの魔法陣を展開し、巨大な光線を落とす。

「これは、ちとやばいか『クラッシュ』!」

「なっ!?!」

ギルダーツさんが光線に手をかざすと御神楽がかき消された。

「出鱈目ですね、ギルダーツさん」

「褒め言葉として受け取るぜ」

五重じゃかすり傷一つつけられないか。それなら今まで試したことはないがもう少し陣を重ねるか。でも陣を重ねるのが多くなるほど発動に時間がかかる。どうやって時間稼ぎするか。

「なんだ、もう打ち止めか？キョウヤ」

「そんなわけ無いですよ、まだまだ行けますよー！」

「ならいい。こいよ」

仕方が無い。『流星』と簡単な『陣』で攪乱しながら陣を展開するしかない。

「行きますよー！『流星』」

僕は『流星』でギルダーツさんに殴りかかるがどれもかわされてしまっ。

「おいおい、同じ手かよ。それじゃあさっきと同じだぜ？」

「わかってますよー！『二重魔法陣 五里霧中』」

二つの魔法陣を展開し濃ゆい霧を発生させる。

「ちっ、これじゃあとこから来るかわかんねー」

よし。今のうちに陣を……………

「めんどくせえな、『クラッシュ』！」

なっ!?霧にも効くのかそれ!?くそっ、九重までしか陣を展開出来なかった、仕方ないこれで!!

「これならどうだ、『九重魔法陣 風雷炎・柱』」

三重になった魔法陣を地面に三つ展開し、炎に雷を纏わせ風で火力を増した柱をそれぞれの魔法陣から出現させる。

「なっ!?」くっくのもできるのかよ!?

三つの柱がぶつかり爆発が起き、砂埃が舞う。

「ハアハアハア、これで無傷だったら人間じゃねえなあの人……………」

案の定砂埃から現れたギルダーツさんは重症まではいかないがあの程度のダメージを受けていた。

「驚いた、まさかその年で俺に回避と魔法を同時に使わせるとはな、まあそれでもダメージは受けたが」

「さっきのくっくってピんぴんしてるって……………本当に化物ですねギルダーツさん」

「そう言うなって、さっきのは流石にやばかったぜ。でも、これで終わりだ」

「何を言ってる……………」

ガクッ

「なっ!？」

突然足の力が抜けて尻餅をついてしまった。魔力切れ？違うまだ魔力は残っている。ならこれは

「そりゃあ、お前の魔法に体が追いついていないんだ。いくら強力な魔法を持っていてもお前はまだ9歳の子供だ。いくらその年で体が強いと言っても、そこまでだ。まあいい、今日はこれで終いだ。」

「は……………い……………」

負けたか。

マカロフ side

わしはまだ目の前で行われている戦いが現実なのか未だに信じられない。高速で移動し、強力な魔法を放つこれだけならこれまで見たことがある。しかし、それは熟練の魔道士達の戦いだ。それを行っているのが僅か9歳の子供だ。にわかには信じられない。

しかし、目の前でそれが起きている。目を背けるわけにもいかないじやろう。ギルダーツも手加減をしているようじゃが、それでもS級並の実力がキョウウヤにあるようじゃ。これならあのA級クエストを受けさせてもよいじやろうと思うていたが、その考えはギルダーツとキョウウヤの戦いが終わった後にはすっかり変わった。まだキョウウヤは9歳の子供。そんな子供があんな強力な魔法の使用に耐えられる

筈がない。戦えなくなった理由もそれだ。もし、クエスト先でこのようなことが起きたら取り返しがない。

キョウヤには悪いが今回は諦めてもらおう。

キョウヤ side

やっぱりあのクエストは受けさせてももらえなかった。残念だ。でもギルダーツさんと戦えたからまあいいか。でも最後に体がついていけないなんてこれは鍛えなきゃ行けないかなあ。マスターも

「お主はまず体を鍛えて自分の魔法に耐えられるようにするのじゃ」

って言われたし。はあ怠いけど頑張るか……………

第五話 3年間

僕がこの世界に来て3年が経った。年はX776年だ。

この3年間は元の世界の毎日よりも断然面白かった。少しこの3年間のことを少し振り返ってみようか。

僕はギルダーツさんに負けて以来体を鍛えることに重点を置いた。仕事と修行を3：7位の割合でやっていた。そして1年が経ち、少づつ自分の体が鍛えられているなど感じられるようになった時期にマスターから僕と同じくらいの年の子供がギルドに入ったと聞いた。名前を確か『グレイ・フルバスター』とって言っていたような。氷の造形魔法を使うらしい。また、重度の脱ぎグセがあるらしい。マスターの話によれば所構わず脱ぎ出しそれに自分も気づいてないらしい。面白いやつが入ってきたもんだ。そう言えばそんなやつをこないだ町で見たような………服を普通に着ていたのにいつの間にかパンツ一丁になっていたときは目を疑ったよ。

そして、それからまた1年がたった頃にようやくマスターからA級クエストを受けて良いと言われた。ここまで長かった………でもおかげで魔法陣の展開スピードが上がったから良かったけど、それに『流星（ミーティア）』にも体がついてけるようになったし。

そして初めて行ったA級クエストは確かに難しかった。魔物達はそれ程強くないが数が多く、持久戦になった。一年前までの俺だったら殺られたかもしれない。マスターありがとうございます。それからまたギルドに僕と同じくらいの年の子供が入ったと聞いた。名前は確か『レヴィ・マクガーデン』と言ったはず。それからしばらくして今度は『エルザ・スカーレット』と言う少女もギルドに来たらしい。僕が入る前からいた『カナ・アルベローラ』やマスターの孫『ラ

クサス』を含めたら同年代の魔道士が五人に増えたわけだ。残念ながら喋ったことあるのはラクサス位だけなんだけど。いつもどおり眠り魔法を使ってクエストを取りに来たときにクエストを選んでギルドの外へ行こうとしたとき偶然入口で鉢合わせしてしまった。それからは質問攻めの嵐だった。まず『お前は誰だ？』から始まり『なぜ毎回こんなことをする？』、『俺と戦え!!』など色々された。え？一つ質問じゃないって？まあいいさ。そのあと成り行きで戦うことになった。結果はまあ少し手こずったけど勝つことが出来た。ラクサスの雷を纏ったときのスピードは僕の『流星』と同じくらいだったし。中々強かった。でもギルダーツさんに全然及ばない。まあそれは僕もだけだ。

そしてこの3年間の間にS級なるものがあると知った。マスターに認められたものしかねず、S級クエストもその者しか受けることが出来ないらしい。S級クエストは二階に貼ってあり一階に貼ってあるクエストとは段違いに難しいらしい。その分報酬は多いが、危険度の方が目立つらしい。今、妖精の尻尾でS級魔道士はギルダーツさんだけらしい。それを聞いて僕の目標は決まった。S級魔道士になることだ。S級クエストは段違いに難しいらしいがその分面白そうだ。これを逃すわけがない。そのために僕は今日も修行とクエストをこなす。

第六話 出会い

キョウヤ side

僕は今A級クエスト『森バルカンの掃討』の途中だ。森バルカンは一体一体はさほど強くはないが群れの長のボスバルカンだけは別格。それに今回のクエストでは『掃討』とある。ということとは全てのバルカンを倒さなければならぬ。正直めんどくさい。でも一度受けた依頼だ。ちゃんとこなさなければ。

さて、どうするか一掃しようと思えば出来るけど森が更地になってしまう。かと言って眠らせるのは面白くない。仕方ない『流星(ミーティア)』だけで今回はやろう。

「その前にバルカンを見つけないきゃ」

一時間後

やっと見つけた！なんでこんなに見つからないんだよ!?それよりも疲れた。戦う前から疲れるって………さっさと片づけて帰る。

「とじつわけですっさとくたばってくださいね(黒笑)『流星』!!」

光を纏い高速でバルカンたちを蹴散らしていく。しかし、なんでもこんなに数が多いんだ？普通は10〜30匹で群れを組む筈なのに50匹位いるぞこれ？

「くそっ、それだけボスバルカンが強いつてことですか」

ボスバルカンが強いほどそこには多くのバルカンが集まる。つまり今回のクエストのボスバルカンは相当な強さを持っているということだ。

「あー、めんどくさいなあ」

一時間後

「後はボスバルカンだけだ」

数が多くて手こずったけど後はボスバルカンだけになった。けど、流石あの数のバルカンを従えてただけあって強い。いや、強いというか頭が良いのか？さっきの僕とバルカンの戦いを見ていただけで何もしなかった。恐らく僕に敵わないと思っているはず……………

ザッ！

「あ!?逃げた!?くそっ、めんどくさいなあ」

僕が考え事してる間にボスバルカンは逃げてしまった。まあ逃がさないけど。ね。すぐに見つけて上げらるよ……………

そんなことを考えてた時期が僕にもありました。

よく考えて見ればここはボスバルカンの縄張りなわけであいつの方が地の利がある。それに比べて僕は探知系の魔法も持っていないし、ここに来るのは初めてだ。明らかに僕の方が不利だ。

「はあ、地味道に探しますか」

— 時間経過

「ボスバルカンどこに行ったんだ？」

おらに— 時間経過

「頼むから出てきてください」

おらにおらに— 時間経過

「……………」

なんでだ。確かに地の利は向こうにあるがなぜこんなにも探してるのに影すら見つからないんだよ……ヤバイ、正直めっちゃ帰りた。朝からこのクエストしてるのにもっ日が傾きかけている。

「でも、ここで逃がしてまた群れを組まれるのは、それはそれでめんどくさいですね。いっその森全部更地にしたら早くね？そうか、その手があったか……ふふふふふふふふふふ」

「きゃあああああ——————!!!!!!」

「は!?僕はなんて恐ろしい考えを!?その前にこの悲鳴!一体どこから!?」

僕はすぐさま『流星』を使い悲鳴の聞こえた方向に向かう。まさか逃がしたボスバルカンが誰かを襲っているのか?

「くそっ、もしそうだったら最悪じゃないか」

僕はさらに速度を上げて行く。案の定着いた先には、ボスバルカンが10歳いくかいかないか位の少女に襲いかかるうとしていた。

「させるかっ!」

『流星』で少女とボスバルカンの間に入り込み

『三重魔法陣 鏡水』

目の前に三重の魔法陣を展開しバルカンの拳を弾き返す。ボスバルカンが怯んでる間に少女をこの場から離さないと

「ちょっとじゅめんね」

「え?………きゃ!?」

少女の背中に手を回し抱きかかえる。いわゆるお姫様だっこだ。仕方ないじゃん、これが一番手っ取り早いし。

「揺れるけどちょっと我慢してね。『流星』」

少女を少し離れた場所まで移動させる。一旦少女を降ろす。その時に気づいたが軽く怪我をしてるみたいだ。

「ごめんね。怪我をしてるみたいだけどちょっと待ってて。あいつをすぐに倒してくるから」

「ポーーーー／／／／／」

「ちょっと聞いている？」

「は、はいー」

「じゃあ、ちょっとだけ待ってて」

僕はボスバルカンに向きを変える。ボスバルカンは既に臨戦態勢に入っており、いつでも攻撃できると言う感じた。『流星』なら速攻で倒すことができるが、僕はそっしよつとは思わない。この三時間の恨みを晴らすためにちよと痛い目にあってもらおうかな（黒笑）

「僕から逃げたことを今になって後悔しなよ。ふふふふふふふふふふ」

ビクッ!?

僕の殺気を感じたらしくボスバルカンは身を震わせる。

「跡形もなく消してあげるよ。『七星剣（グランシヤリオ）』!!」

あらかじめ展開しておいた魔法陣から隕石に相当する魔力弾をポスバルカン目掛けて放つ。当たった瞬間爆風がおき砂埃が舞う。しばらくして、砂埃が消えるとそこには更地になっており、ポスバルカンは消えていた。

「これでクエスト終了。早くあの子の手当てをしなくしちゃな」

少女の下に駆け寄り、持ってきてたバックの中なら応急処置用の道具をだす。

「大丈夫かい？傷、あったでしょ？見してごらん。応急処置するから。」

「はい、お、お願いします／＼／＼／」

なんか、反応がおかしいな？まあいいか。それよりも治療治療。

治療後

「本当にありがとうございました」

「別にお礼なんかいいよ。元は僕があいつを逃がしたのが原因なんだし、それよりも立てるか？」

「はい。んしょと……あれ？」

少女は立とうとしたが尻餅をついて倒れてしまった。怪我したのが足だからしょうがないか。仕方ない

「きゃ!?また!?」

僕は先程のように少女をお姫様だっこした。

「ねえ、君の家はどこ?その足じゃ帰れそうにないから送って上げるよ」

「そ、そんな、何から何まで申し訳ないです」

「いいからいいから」

「わかりました。……………せめてこの運び方はやめてください」

「わかったよ。じゃあおんぶするから背中に乗って?」

「は、はい」

よし、乗ったみたいだね。それじゃあ行きますか。あ!?その前に

「どこに送ればいいかな?」

「あ、妖精の尻尾っていうギルドまでお願いしますノノノノ」

妖精の尻尾!?まさか、この子も妖精の尻尾の魔道士なのか?でも妖精の尻尾ならちよっどいい。

「妖精の尻尾?そしたら君も魔道士かい?」

「はい、ついこないだ入ったばかりですけど、妖精の尻尾の魔道士です。えっと……………あのお名前は?」

「ああ、そう言えば教えてなかったね。僕の名前はキョウウヤだよ」

「私も教えてませんでしたね。私は『リサーナ』っていいます。ところでキョウウヤさんはどのギルドに所属してるんですか？」

「敬語使わなくていいよ。なんか慣れないから、あと呼び捨てで構わないよ。」

「うん、わかった」

「えっと、僕のいるギルドも妖精の尻尾だよ」

「本当に!?でも見たことないよ?」

「そりゃあね。だって僕はあまりギルドにいかないし、行っても皆を眠らせてから入るから知らないのも無理ないよ」

「あの急に眠たくなるのキョウウヤのせいだったの!?でも、なんでそんなことするの?」

「人と話すのが嫌だからかな」

「でも、私とは話してるよ?」

「なんていうか一人や二人くらいなら話せるけど数が多くなると嫌なんだ」

「みんなと話すの楽しいよ?」

「僕はどちらかというに参加するよりそれを見てるのが好きだから別にいいんだよ。」

そんなことを話してるうちにギルドに着いた。そしていつも通り眠り魔法を使い。中に入る。中に入った瞬間、リサーナにも魔法が聞いて眠ってしまった。

「マスター今戻りました」

「おお、戻ってきたか。お主、これはどうにかならんのかいのう？」

「無理です」

「そ、そうか。ん？その背中におるのは誰じゃ？」

「リサーナって子だけど。クエスト先で偶然助けて、歩けなかったからおんぶして連れてきました」

「おお！良かった。帰りが遅くてミラやエルフマンたちが心配しておってるお。探しに行こうとしたところじゃったんじゃよ」

「ミラ？エルフマン？」

「そう言えばお主は知らなかったのう。その背負っておるリサーナの姉と兄じゃ。三人ともつい最近入ってきたのじゃから知らなくて当然じゃ」

「そうだったんですか。それよりもなんでリサーナは一人で森にいたんですか？」

「リサーナは森の薬草を取ってくるといふ簡単なクエストに言ったはずじゃったんじゃがまさか、キョウヤ、お主のクエストと鉢合わせるとは……………」

「ハハハハハハ……それじゃありサーナをよろしくお願いします。僕はこれで失礼します。」

「ちゃんと眠り魔法を解いてから帰るのじゃよ！」

「分かっていますって」

そうして僕は帰路につくのだった。

リサーナside

私が目を覚ますとそこは見慣れた場所だった。体を起こして立ちうとするが痛みが走りコケてしまった。

「リサーナ、おきたのじゃな……って何をしておるんじゃ！怪我をしているんじゃから大人しくしとれい」

「あのマスター！き、キョウヤは!？」

「あやつはお主を送り届けたあとすぐにかえったぞい」

「そっか……」

「なんじゃ？お主、キョウヤに惚れたか？」

「!?ち、違うよ!! た、確かにカッコよかったし優しかったけど……………」

「よいよい、そうか最近の子はその若さで恋をするのか……………ませよのし」

「……………もう、マスターどっか行って!!」

「わかったわかった。今日はギルドに止まっていきなさい。それじゃあ家まで帰れんじやろ。ミラたちにはワシから言っとくから心配はしなくてよい。じゃあの」

そう言ってマスターは部屋から出ていった。

「キョウヤ……………か」

初めて会ったけど良い人だったなあ。私とあんまり年変わらなさそうだったのに凄く強くて……………その、カッコよかった。それに優しかった。でも、あんまり彼のこと知らないなあ。もっと知りたい。なんだろうねこの感じ??

第七話 S級に

キョウヤ side

リサーナを助けてから一週間くらいたった。僕は今、ギルドから少し離れたところに借りた借家の部屋ににいるんだけど……………

「な、なんでリサーナが僕の部屋にいるの？」

起きたらリサーナが僕の部屋のキッチンにたっていたのだ。リサーナは僕の質問に頬を朱に染めながら恥ずかしそうに

「き、来ちゃった」

自分の顔が熱くなるのを感じる。とっさに手で顔を隠す。リサーナと僕との身長は結構な差があり、自然とリサーナは上目遣いになる。意図してやってるわけじゃないから夕チが悪い。

「……………」

「キョウヤ？どうしたの、顔を隠して。や、やっぱり来たらダメだった？」

「だ、ダメじゃないけど事前に連絡は欲しかったかな」

「キョウヤとはまだ一回しか会ってないのにどうやって連絡を取れば良かったの？」

ぶくーと頬を膨らませて拗ねたように言うリサーナ。でもそう言われてみればそうだ。まだリサーナとは一回しか会ってないし、最後

は眠らせたから連絡のとりようがないか。

「ん？でも、そしたらどうやって僕の家がわかったの？」

「マスターに聞いた！」

マスター あああああ!!!。まあ別に秘密にしてる訳じゃないからいいけどさ。せめて本人に確認ぐらいとって欲しかったなあ。それに改めて考えてみると、マスター、ギルダーツさん、リサーナが僕の家を知っているんだよな。これ以上広まるのはいやだなあ。ギルダーツさんは多分忘れてるからいいとして、マスターとリサーナには口止めしなきゃな。

「なあ、リサーナ」

「なに、キョウヤ？」

「俺の家のことは他の奴らには黙っといってくれないかな？」

「なんで？」

「そんな深い理由はないよ。ただあんまり知られるのは嫌だからね」

「うーん。あー別にいいよ、黙っていても……………」

あれ？なんかリサーナがどこかの悪代官みたいな顔になっているよ？嫌な予感がするのは気のせいだよな？

「その代わり、いつでもキョウヤの家に来てもいい？」

「……………」

「だ、ダメ？」

「いやいや、別にいいよ。ただそんなことでいいの？」

「うん！私はこれがいいの」

「そっか。なら秘密にしといてね」

悪代官みたいな表情してたからどんな無茶をさせられるかと思ったらそんなことか、よかったよかった。

「そう言えばキョウウヤ。マスターがギルドのわしの部屋まで来いって言ってたよ。なんだか重要な話だった」

「マスターが？」

重要な話ってなんだろう。クエストのこと？それとも何かヤバイこと？でも、不意に目に入ったカレンダーを見たらそんなの疑問すぐに解けた。

「あー、もうそんな時期か……………」

「なんの時期なの？」

「そう言えばリサーナは最近ギルドに入ったから知らないのか。この時期はS級魔道士昇格試験があるだよ。」

「S級？」

「簡単に言えば通常のクエストより遥かに難しく危険なクエスト。S

級クエストを受けることのできる魔道士のことだよ。年に一回、そのS級魔道士になれるかを試験するのが今の時期なんだよ」

「この時期にマスターに呼ばれるってことは昇格試験を受けることになるの、キョウヤ？」

「多分そうだと思うよ」

やっとだ。やっとギルダーツさんと同じ所に立てる。三年前敗北してから僕はひたすら自分を鍛えた。血反吐を吐くくらい、ひたすら。その結果が身を結ぼうとしている。

「必ず合格してみせる」

「それよりもキョウヤ、マスターの所に行かなくていいの？」

「あ!? ちょっと行ってくる!!」

「キョウヤ待って！ 部屋のか、ぎ……………行っちゃった。どっしりよ」

リサーナが何か言ってたような気がするけどそれよりも急がなきゃ。眠り魔法を使うのもめんどくさい。ギルドに突っ込み、酒場を

通り抜ける。

「誰だあいつ!？」

「あんな奴ギルドにいたか？」

周りから声が聞こえるが今は無視だ。マスターのいる部屋の前まで行ってノックもせずに入る。

「マスター!!すみません遅れました!!」

「ぬお!?誰じゃ!?!……………ってキョウヤか、遅かったのう」

「すみません。リサーナと話し込んでしまって……………」

素直に遅れてきた理由を話すと突然マスターの顔が緩んできて

「そうか、そうかお主もそういう年頃かのお」

「はっ」

ニヤニヤしながらそう言った。なぜだろう、行っている意味はわからないがとてつもなくこのニヤけた顔を殴りたくなった。

「……………で重要な話ってなんですか？」

「おお、忘れとった。お主も感じておるとおもうが今年はキョウヤ、お主一人が受験者じゃ。一週間後にハルジオンの港に来い。試験会場にはそこからいくからのう。それまでに準備しとくのじゃぞ」

「はい、わかりました。そう言えば試験会場はどこですか？」

「今年はお主だけじゃからのう。試験内容が少々特殊じゃから何も無い無人島です予定じゃ。試験内容はまだ言えないがのう」

「それだけで充分です。それでは一週間後に」

僕はそう言い残してマスターのいる部屋から出たのだが、

「あの、あなたたちは何をしているんですか？」

部屋から出た先にはおそらくギルドメンバーと思われる人達がいる。そう言えば眠り魔法を使わなかったんだっけ、ヤバイ。この状況はヤバイよ。

「なあお前!?!」

上半身裸の少年が質問をしようとしたが

「皆さんすみません!」二重魔法陣『催眠霧（スリープミスト）』

「な、なにをし、……………」

とつさに眠り魔法を発動させ、全員を眠らせる。危なかった。このまま質問攻めとかされたらたまったもんじゃない。でもこれで僕の顔はバレてしまったなあ。はあ、終わってしまったことはしょうがない。それよりもS級魔道士昇格試験だ。僕はそのまま帰路につく。

「すみませんでした」

僕は今、家に帰ってきて謝罪の最中だ。だれにかつて、リサーナだよ。鍵を閉めていくのを忘れたらしく僕が帰ってくるまでずっと留守番してくれていたらしい。

「もう、突然飛び出して行っちゃうんだから」

案の定リサーナは怒っていて頬を膨らませている。

「本当にすみませんでした。僕に出来ることなら何でもするから………」

「なんでも!?!」

あ、なんか選択間違えたかも……………

「う、うん。僕に出来ることならね……………」

「それなら許してあげる。キョウヤに何をしてもらおうかなあ」

許してくれて嬉しいけど、僕は大丈夫なんだろうか……………